

イタリアにおけるマルサス受容の一断面

堀田誠三（福山市立女子短期大学）

この報告では、イタリアにおける革命期から19世紀前半のイギリス古典経済学受容のなかでのマルサス人口論への反応をとりあげてみたい。その素材は、イタリア経済学史のなかでもよく知られた人物とはいいい難いカニャッツィ（Luca de Samuele Cagnazzi, 1764-1852）である。

カニャッツィは、1764年イタリア南部、ナポリ王国のアルタムーラ（現在プーリア州、人口は2007年で68,737人、1861年では17,499人）に生まれた。この年には、ベッカリアの『犯罪と刑罰』が刊行されるとともに、イタリア中南部をおそった飢饉はナポリ王国の旧体制の欠陥を明白なものとした。そして60年代はイタリア諸国における啓蒙的改革の動きが盛んとなった時代であった。

かれはバリで初等教育をうけたのち、故郷アルタムーラの大学で哲学、法学、自然科学をおさめ、ナポリに出て修業時代を終え、聖職者の道を歩みはじめる。この頃には経済学への関心はめばえていたようで、『自伝』（*La mia vita. Memorie inedite, a cura di A. Cutolo, Milano, Hoepli, 1944.*）によれば、すでに「スミス？（Smit）、ヤング？（Arturo Lunch）、ミラボー」を読んでいたとされる。そして経済学は総合科学であり、その研究のためには公法と自然科学の学識が必要なのだ（*Ibid.*, pp. 8-9. —以下『自伝』からの引用にはpp. 8-9. のようにページ数のみしめす）。1785年、アルタムーラの数学物理学講座の教授に就任する。

そのアルタムーラで、1799年のナポリ革命にまきこまれることになる。カニャッツィは、フランス軍の協力下に設立された共和国臨時政府からの招聘には、態度を保留し、自由の樹を植えて自由と平等をさげぶ学生や民衆には、「真の自由と平等」は福音書と教会の教えにある、といさめていた（p. 17.）。しかし枢機卿ルッフォ（Fabrizio Ruffo di Bagnara, 1744-1827）のひきいる反革命軍がプーリアにも入ると、かれはナポリに避難し、それから放浪生活を余儀なくされる。シチリア、トリエステ、ヴェネツィア、グラーツ、ボローニャ、ミラノを経由して、1800年にフィレンツェにたどりついた。苦難の経験にもかかわらず、「トスカナ滞在は、わたくしにとって最高に喜ばしいものであったし、わたくしの生涯の幸い多き時期である」（p. 54.）といわれる。フィレンツェでは経済学講座の教授に任命され、「農学会（Accademia dei Georgofili）」をはじめ各種アカデミーの会員に推挙され、その地の文人や学者との交友をむすんだ。

1801年末、カニャッツィはナポリ王国にもどり、1806年にはフランス占領下にナポリ大学経済学教授に任命される。1808年、フランス軍の将軍ミュラ（Joachim Murat, 1767-1815）

がナポリ王に即位し、その統治下でカニャッツィはいわゆる「ミュラ統計」の作成にかかわった。このような行政経験にあわせて、『統計術要論』(*Elementi dell' arte statistica*, 2 voll. Napoli, Flautina, 1808-09.) によって、かれもイタリア経済学史における統計学の伝統の形成に貢献したといえる。経済と政治にとっての統計は、医学における解剖学・生理学と同様の役割をはたす、というのがカニャッツィの主張であった(p. 53.)。経済学の教科書『政治経済学要論』(*Elementi di economia politica*, Napoli, Sangiacomo, 1813.)の刊行もミュラの時代のことである。1815年のブルボン家の復帰後も、かれの公的地位は失われず、1816年に成立した両シチリア王国と教皇庁との政教条約の締結(1818年)をめぐる交渉では、主要な登場人物のひとりであった。

1819年にはナポリ王立科学アカデミーで、「人口の周期的増加について」(*Sul periodico aumento delle popolazioni*)という報告をおこない、それは『プーリア王国人口論』(*Saggio sulla popolazione del Regno di Puglia*, parte prima, Napoli, Trani, 1820, parte seconda, Napoli, Filomatica, 1839.)に序論として収録された。かれによれば、マルサスの人口原理は、人口増と食糧生産の両面にわたって承認できない。まず理論的には人口増加は出生数と死亡数の差によって決定されるというのがカニャッツィの主張である。また人口をささえる生活資料の生産は「公共のインダストリー (*pubblica industria*)」に比例するのであり、人口は生活資料だけでなく、「福祉 (*benessere*)」に比例して増大する。その「福祉」の意義は人間の能力の自由な使用というところにあり、「公共の生活資料 (*pubblica sussistenza*)」の基本的生産は、生産的労働、生産的土地と生産的資本との利用 (*intelligenza*)、土壌と気候との有利な条件、これらの複合比で増大する。それから、自然的、政治的、道徳的障害に比例して減少する。そうであるなら、生活資料は等差級数どころか等比級数的に増加する、と推論できる」(pp. 134-135.)。

ここにみられるのは、ジェノヴェージ以来の啓蒙的改革の遺産である。カニャッツィは、聖職者として当然なことに実践道徳の基礎に宗教を置いたけれども、上にみた政教条約の締結交渉にあたって、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」というという原則を採用したと述べている (pp. 121 e 124.)。すなわち啓蒙的改革の前提として、教皇庁の世俗政治への介入を認めない国権主義 (*giurisdizionalismo*) の立場をとったのである。

さら古代と近代の経済原則の相違にかんする論説では、古代と近代を区別する指標として1. 奴隷の廃止、2. キリスト教、3. 羅針盤の発明、をあげている。これらの3点が意味するのは、古代の経済は人類全体を視野に入れず、都市の市民を対象としていたにすぎないということである。「古代人は経済を、その本来の語義から家政 (*economia familiar*) とのみとらえて、今日われわれが公共経済 (*economia pubblica*) よぶ社会の福祉 (*bebessere sociale*) にまで思いいたらなかった」(pp. 190-191 e 332)。

この古代と近代との比較からわかるのは、古代が経済を家政という狭い私的利益からのみとらえたのにたいして、経済問題を社会全体の、いいかえれば公共の、観点からあつか

うところに、近代の優位性をみるというカニャッツィの立場である。ここから公法研究の重要性への言及や、「公共のインダストリー」や「公共の生活資料」といったやや奇異にひびく用語が使用された理由も了解できるだろう。

人口の基礎をなす生活資料の生産という観点からは、イタリア啓蒙の子としてカニャッツィは、軍事的征服を原理とするローマに否定的である。すなわちローマ時代は前代の繁栄を浪費していたのであり、ノルマン建国以来人口は増加を開始し、諸王朝の交代の末、1734年にブルボン家のカルロがナポリ王となって以来、1804年までの70年間に人口は約300万人から500万人に増大したという。このことはブルボン家の統治の賢明さの証拠とされる(p. 148.)。ここにみられる歴史の時代区分は、国権主義から啓蒙へと受けつがれたものであるし、ブルボン時代は、同時に啓蒙的改革からナポリ革命への時代でもあった。カニャッツィが強調するのは、暴力と抑圧にたいする各人の権利の保障が人口増加の出発点となること(pp. 147-8.)だから、ノルマン建国による秩序回復が人口増大の根本的要因であるというのが、カニャッツィの歴史認識だといえるであろう。

こうした歴史認識を基礎に、経済学が組み立てられる。「労働が、あらゆる財産を獲得するための手段にして権原であると最初にのべた人は、ロックであった。ケネーは、知られるように自然的生産と経済的生産とを混同しつつ(わたくしの『政治経済学』をみよ)、富はすべて土地から生まれると主張した。スミスはロックの原則をひきついだが、応用のさいには時折ケネーの体系に身をゆだね、両方のシステムのあいだで動揺をしめした。リカードは経済学を著し、土地はそれ自体ではどのような利潤も生まないと主張することで、ロックの体系に深く加担している」(p. 215-216.)。今はこの引用の詳しい検討をする余裕がないけれども、ロックの労働による所有とリカードの地代論を直結させるというカニャッツィの理解の基礎にあるのは、農民的土地所有の問題であろうという推測だけ、のべておきたい。

1820年から21年の立憲革命の終息後、公職と大学の教授職をともにしりぞいた。これ以降の研究と思索との暮らしのなかで注目すべきは、『福音書の道徳規律』(*I precetti della morale evangelica posti in ordine didascalico*, Napoli, Trani, 1823.)の刊行およびイタリア科学者会議への参加(1840年フィレンツェ大会出席、1845年ナポリ大会準備委員長)、であろう。ところが48年革命が発生すると、84歳の高齢のカニャッツィはまたも政治の表舞台にたたされることになる。革命運動の高揚におされて国王フェルディナンド2世は憲法を發布し、カニャッツィは最高齢のゆえに議会の議長に就任する。だが「5月15日」の混乱に乗じたフェルディナンド2世の反革命クーデタは成功し、扇動と国王退位勧告への署名という嫌疑をかけられたカニャッツィは、トスカナ大公国のリヴォルノへ逃亡した。けれども重病のためナポリへ帰国し、最後の日々を、かれは自宅拘禁のうちに過ごした。